

機関番号：12603

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2010

課題番号：19520329

研究課題名（和文）コリマ・ユカギール語の記述言語学的研究

研究課題名（英文）Descriptive Study of Kolyma Yukaghir

研究代表者

長崎 郁（NAGASAKI IKU）

東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・研究員

研究者番号：70401445

研究成果の概要（和文）：

本研究課題は、北東シベリアのコリマ川上流域で話されるコリマ・ユカギール語について、現地調査による一次資料の収集と整理・分析をおこなうこと、さらに、一次資料の整理・分析と整理にもとづき、文法の記述研究をおこなうことを目的としたものである。研究実施期間の4年の間に、ロシア、マガダン州およびトムスク州において4度の調査を実施し、コリマ・ユカギール語の言語資料と日本国内では入手困難な文献資料、また、ソ連時代の現地少数民族の言語状況に関する資料を収集した。本研究により得られたこのような一次資料は、コリマ・ユカギール語が存続の危機に瀕していること、すなわち、流暢な話者が少数の高齢者に限られていることから考えて、非常に高い価値を持つものと言える。

記述研究に関しては、研究実施機関内に音韻論から形態論、統語論までをカバーする文法構造の全体像をまとめたほか、いくつかの個別の問題 - (a) クリティック（倚辞）の認定の問題、(b) 関係節構造と関係節に現れる動詞分詞形の用法、(c) いわゆる名詞句外所有の構造 - をとりあげて考察をおこなった。これら個々の研究は、いずれもコリマ・ユカギール語の文法研究に新たな知見をもたらすものであったと言えるであろう。

今後はこの研究課題をさらに発展させ、資料の共有を図るとともに、通言語的・類型論的視点からも様々な文法現象に関する考察をおこなっていきたい。

研究成果の概要（英文）：

This research project was aimed to collect data and conduct the descriptive study of the Kolyma Yukaghir language through fieldwork. During the 4-year period, I have conducted four fieldtrips to Magadan and Tomsk Regions of Russia. In these fieldtrips, I was able to collect primary data of the language and get ahold of publications that were difficult to obtain in Japan; further, I was able to research the linguistic situation among the minorities from the Soviet era. These linguistic data are invaluable, because the number of speakers of this language is currently rather limited.

As regards the descriptive study, I was able to write the grammatical overview and investigate such special issues as the difference between a word and clitic, and as well as that between a clitic and an affix, the relative clause structure and the usage of the participle forms, the external possession construction, etc.

交付決定額

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2008年度	700,000	210,000	910,000
2009年度	700,000	210,000	910,000
2010年度	900,000	270,000	1,170,000
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：言語学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：コリマ・ユカギール語、シベリア、ロシア、危機言語、記述言語学

1. 研究開始当初の背景

研究代表者がこれまでに研究対象とし、現地調査を続けてきたコリマ・ユカギール語は、世界的に見ても少数の研究者しかおらず、また、話者の高齢化と減少がかなりの程度進んでいる。ユカギール語は近隣のいずれの言語とも系統関係を持たないが、かつてシベリアのかなり広い地域に分布していたことが分かっており、この地域における諸言語の言語的接触や歴史的関係に関する研究においても重要な位置を占める言語である。このようなことから、この言語の一次資料を収集・保存すること、文法構造の総合的な記述を進めることは、急務の課題であった。

2. 研究の目的

上述のような背景から、本研究課題では、研究の立ち後れているコリマ・ユカギール語について、

(1) 現地調査をおこなって語彙や例文、テキストなどの一時資料を収集し、その分析と整理を進め、今後の言語研究の基盤となるデータの拡充を図ること、

(2) 全体的な文法構造の把握に努めながら、非定形動詞の機能といったこれまでに明らかでなかったいくつかの特定の問題をとりあげ、記述研究をおこなうこと

の2つの点を主な目的とした。

3. 研究の方法

研究の目的(1)と(2)のそれぞれについて次のような研究方法をとった。

(1) 年度毎に現地調査を実施し、一次資料を収集する。この資料に、研究代表者がこれまでに収集した資料、および、国内外で出版された言語資料を加え、コンピュータ上で扱えるように電子化し、調査地、話者名といった情報と文法分析、翻訳を付加して、データベースを作ってゆく。

(2) 上記(1)に基づき、文法構造の全体像の記述をまとめてゆく。その際には、非定形動詞の機能のほかにも、これまでの記述研究によって明らかにされてこなかった問題を把握し、それを重点的に調べながら分析・考察

を進める。

4. 研究成果

① 2007年度：

7月～8月にロシア、マガダン州セイムチャンとサハ共和国ネレムノエで現地調査を実施し、民話3編を含むテキストの音声資料の収集、語彙調査、形態論と統語論に関する聞き取り調査をおこなった。音声資料については、デジタル形式で録音をおこない、今後の利用と公開に備えた。調査で得られたテキスト資料を文字化し、形態素分析をおこなった。

また、コリマ・ユカギール語の倚辞（付属語）の問題をとりあげ、その認定の基準、すなわち自立語や接辞と倚辞との違い、倚辞と認定できる要素の機能について分析と考察をおこなった。この成果は、論文「コリマ・ユカギール語の倚辞について」として発表した（「主な発表論文など」の雑誌論文⑤を参照）。

② 2008年度：

8月にロシア、マガダン州マガダン市で現地調査を実施し、研究代表者がこれまでの調査で蓄積してきた民話などの談話資料の分析・解釈の確認、新たな音声資料の録音をおこなった。

文法構造の全体像を記述する作業を、これまでにまとめた研究成果を見直しつつ進め、学位請求論文としてまとめた（「主な発表論文など」の雑誌論文④を参照）。また、上記研究の一部を一般向けの図書『ニューエクスプレス・スペシャル 日本語の隣人たち』（「ユカギール語の世界」の執筆を担当）として発表した（「主な発表論文など」の図書①を参照）。

③ 2009年度：

資料の分析・整理のために、SIL International によって開発・公開されているソフトウェア、Toolboxを導入した。また、和訳に加えて英訳と露訳の作成を開始した。3月には、ロシア、マガダン州マガダン市で現地調査を実施し、これまでに得られた資料の理解に不可欠な歴史的背景に関する調査をおこなった。

記述研究に関しては、(1) 関係節構造と関係節に現れるいくつかの動詞形式（動詞分詞形）の使い分け、(2) いわゆる名詞句外所有

構文と呼ばれる構造、の2つの問題に関する分析と考察を進めた。(1)(2)のいずれについても、日本言語学会において口頭発表をおこない(「主な発表論文等」の学会発表②④を参照)、さらに、(1)については論文「コリマ・ユカギール語の関係節における3種類の分詞」としてまとめた(「主な発表論文など」の雑誌論文③を参照)。

④ 2010年度:

2009年度に引き続き、Toolboxを用いた資料の分析と整理、英訳・露訳の作成を進め、その中から民話1編に文法分析を付して論文として発表した(「主な発表論文など」の雑誌論文①を参照)。

記述研究に関しては、まず、通言語的な観点から、他言語の研究者と議論を重ねた上で、文法全体の概要を文法スケッチとしてまとめた(「主な発表論文など」雑誌論文②を参照)。また動詞の分詞形に関する前年度の成果をさらに発展させ、研究発表をおこなった(「主な発表論文など」の学会発表①を参照)。そのほかにも、いわゆる非定形動詞の機能と非独立的な節のタイプ、所有接辞(propriative suffix)の機能と所有構文に関する分析を進めた。これらの分析の成果については、学会発表・雑誌論文の形で順次、成果を発表してゆく予定である。

また、3月にはロシア、トムスク州のトムスク国立教育大学において調査を実施し、日本では入手困難な文献資料を収集するとともに、今後の共同研究の可能性を探るため、同大学におけるシベリア少数言語の研究者と交流を図った。

⑤ 現地調査および資料の収集、分析と整理に関して:

本研究課題では、当初4年間で10ヶ月程度の現地調査をおこない資料を収集する計画であったが、ビザ取得が近年困難になったこと、ロシア国内での物価の上昇、および話者の高齢化と減少など、いくつかの要因が重なったため、計画を修正し調査期間を大幅に減らさざるをえなかった。したがって、資料の量の点からは当初の目標を達成することができなかったが、その整理・分析に関しては、Toolboxの導入により順調に作業を進めることができた。現在は、英訳と露訳を作る作業を継続し、資料の公開を目指している。

⑥ 文法記述に関して:

文法記述については、曲がり形にも総合的な文法記述をまとめることができたこと、年度ごとに様々な文法現象をとりあげて考察をおこない、新たな知見を得ることができたことから、期待された成果は達成できたものと考えている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計5件)

① 長崎郁、「コリマ・ユカギール語の民話テキスト(4): A.V. スレブツォワの「エルシェネイ」」、北方言語ネットワーク(編)『北方言語研究』第1号(北海道大学大学院文学研究科)、185-195、2011年、査読有

<http://eprints.lib.hokudai.ac.jp/dspace/handle/2115/45225>

② Iku Nagasaki, “Kolyma Yukaghir”, Yamakoshi Yasuhiro (ed.) *Grammatical Sketches from the Field* (ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies), 213-256, 2011年、査読無

③ 長崎郁、「コリマ・ユカギール語の関係節における3種類の分詞」、呉人恵(編)『環北太平洋の言語』第15号(富山大学人文学部)、17-30、2010年、査読無

④ 長崎郁、「コリマ・ユカギール語の記述研究 -形態論を中心に-」、千葉大学社会科学部提出博士論文、1-413、2009年、査読無

⑤ 長崎郁、「コリマ・ユカギール語の倚辞について」、『アジア・アフリカの言語と言語学2(特集 クリテックの諸相)』(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所)、29-48、2007年、査読有、

<http://repository.tufs.ac.jp/handle/10108/51089>

[学会発表] (計4件)

① Iku Nagasaki, “Three Types of Participles in Relative Clauses in Kolyma Yukaghir”, International Workshop on Cross-linguistic Studies on Clause Combining (The 3rd meeting of the ILCAA Joint Research Project “Cross-Linguistic Studies on Clause Combining”), 2010年10月31日、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

② 長崎郁、「コリマ・ユカギール語の名詞句外所有構文について」、日本言語学会第139回大会、2009年11月28日、神戸大学

③ Yukari Nagayama and Iku Nagasaki, “Studies of Paleosiberian Languages in Japan”, Third International Conference on

Field Linguistics, 2009 年 10 月 19 日,
Russian Academy of Sciences, Institute of
Linguistics (Moscow)

④長崎郁、「コリマ・ユカギール語の関係節
における 3 種の分詞の用法」、日本言語学会
第 138 回大会、2009 年 6 月 20 日、神田外語
大学

〔図書〕(計 1 件)

①中川裕 (監修) / 月田尚美・丹菊逸治・李
林静・小野智香子・江畑冬生・長崎郁・永井
佳代・塩谷亨、白水社、『ニューエクスプレ
ス・スペシャル 日本語の隣人たち (CD 付き)』、
2009 年、104-123 (全 162 頁)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

長崎郁 (NAGASAKI IKU)

東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化
研究所・研究員

研究者番号：70401445